モノグラフ
中学生の世界
vol. 32

中学生の友だち感覚

目次

特集●友だちを持たない成長のスタイル……深谷昌志……2

調査レポート●中学生の友だち感覚……深谷昌志……8

本報告書の要約……8

第Ⅰ章　テーマ設定とサンプル

1．友だちのとらえ方……10
2．サンプル構成……11

第Ⅱ章　友だちづき合いの姿

1．友だちとしていること……12
2．よい友だちの条件……18
3．友だちにしてあげること・してもらうこと……22

第Ⅲ章　友だちづき合いの性差

1．女子の友だちづき合い……24
2．友だちについての男女の開き……28

第Ⅳ章　友だちの多い子・少ない子

1．友だちの多い子のつき合い方……30
2．友だちの多少と自我像……34

資料1　調査票見本……41
資料2　学年・性別集計表……50

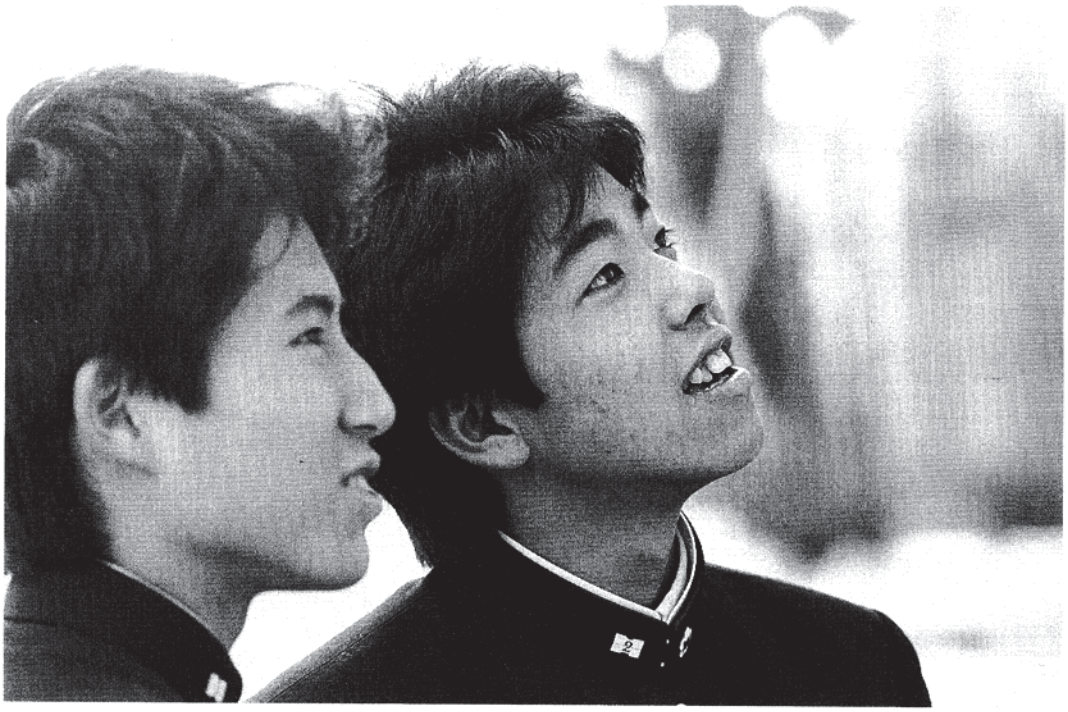
※おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

特 集

友だちを持たない成長のスタイル

放送大学客員教授

深谷昌志



地域の中で育つ

友だちづき合いの下手な中学生が増加している。というより、みんなと表面的に楽しそうにつき合っているが、ひとりひとりを見ているとつき合いが浅い印象を受ける。親友というのでなく、「友だちの友だちはみんな友だち」というような軽いタッチのつき合いがふえているのではないか。

そうした友だち関係を見ていると、『走れメロス』などという話は郷愁の世界の産物という気がしてくる。しかし、中学生たちの友

だちづき合いの浅さは、子どもたちの生育史にかかわっているように思う。

長い間、子どもたちは、友だちの中で成長すると信じられてきた。事実、かつての子どもについていえば、子どもたちはその年齢に応じて、友だちの範囲を拡大しながら成人していくのが通例であった。

大づかみにすると、かつての友だち関係は、①ままごと遊び仲間、②ギャング集団、③若衆組や青年団、のような三層から構成されていた。まず家のまわりに何人かの子が集まり、ままごと遊びをするのが、友だち関係の出発点になる。もちろんままごと遊び仲間は男女混合で、出入りの自由な、集団内の構造が流動的なグループで、集団というよりふれ合い仲間という感じが強い。そうしたグループに、3歳くらいから仲間入りをする。

しかし小学生になると、ままごと遊び仲間を卒業して、子どもたちはギャング集団へ帰属する。といっても低学年の子どもたちは、いわゆる「ミソッカス」で、先輩たちのまねをして、ついて歩く形をとる。

ギャング集団は、子どもたちの群れをなして遊ぶさまがギャングを連想させることから命名されたという。念のためにギャング集団の特性を列挙しておくと、①同じ地域に住む、②7～8人から10数人の、③同性で、④異年齢の子どもから構成される、⑤遊び仲間集団で、⑥その集団なりの文化を持ち、⑦集団内の役割の分化した、⑧子どもの自治組織、などとなる。

これらの特性のうち重要なのは、「その集団なりの文化を持つ」(⑥)点で、集団のメンバーは暗号や秘密のかくれ家などを共有していた。そのほか、メンコやビー玉、チャンバラごっこなどの遊び方についても、その集団なりのルールが工夫されていた。

考えてみると子どもたちは、出生以来、親のもとで生活を送り、その後、幼稚園や小学校で教師からの指導を受けて育ってくる。換言するなら、おとなに依存しつつ、おとなたちの価値観を受容する過程である。もちろん、生理的な未熟児として生まれるヒトの子の場合、ある程度の期間、受容の生活を送らざるを得ないし、特に現代のように一人前になるために多くの知識や技術の習得を求められる時代を迎えると、受容期間の延長は避けられまい。

もともと社会化とは、そうした受容を基本とした過程であろうが、その中にあってギャング集団は、おとなの眼から隔離されているだけに、受容の比率が低く、子どもたち自身が自発性を発揮できる数少ない機会に属する。

そうしたギャング集団に所属し、男の子たちは群れをなしてメンコやビー玉に興じ、女の子たちはなわとびやおはじきをする。考えてみると、子どもの時代の楽しい思い出の大半が、そうした友だちとのふれ合いから成り立っているように思う。

しかし小学校を卒業すると、子どもたちはギャング集団を離れて、昔なら若衆組や娘組、明治末期くらいからは、青年団や処女会に入る。村で生活をしていくのに必要な農作業の知識や入会地のルールなどを学んでいく機会

である。もちろん娘組の場合は、裁縫や料理などの習得が主要な課題であった。

このようにかつての子どもたちは、家のすぐまわりの「ままごと遊び仲間」から、町内や字(あざ)などを単位とする「ギャング集団」、そして村や町を基盤にした「若衆組」と、年齢に応じて所属集団をかえながら成長していったのである。そうした意味では、幼稚園・小・中学校という学校段階に対応した形で、子どもたちは3つの仲間集団を持っていたともいえよう。

しかし若衆組はともかくとしても、青年団も昭和30年代前半には姿を消した。そしてこの10年来、子どもの世界からギャング集団も消滅し始めている。

群れ遊びをしない子どもたち

それでは、具体的にふだんの日、子どもたちはどんな遊びをしているのであろうか。夕方の街角を歩いても、しんと静まりかえり、子どもの声は聞こえてこない。友だちと遊んでいる子がほとんどいないのはたしかだが、都市はともかく、山村へ行けば元気に遊んでいる子どもの姿が見られるのではと思った。そして子どもを対象とした調査を開始した頃、サンショウウオでも探すような意気ごみで、山奥を目指した時期があった。しかし、調査を何回重ねても得られる結果はいつも同じで、子どもたちは家の中にこもって夕方までの一刻を過ごしていた。

山村の場合は過疎化が引き金となって、そして都市では、遊び場の喪失に、交通事情の悪化や塾やけいこごと通いなどが加わった形で、ギャング集団の消滅状況が進んでいる。もちろん地域によって、高速道路が校区を分断して、あるいは、人工ダムができてなど、主たる要因はさまざまだが、いずれにせよ、全国レベルで見ると複合汚染のようにいくつかの要因が相乗作用をして、今やギャング集団は郷愁の世界にしか姿をとどめていない状況を迎えている。

ギャング集団を失った子どもたちは、家の中でテレビを見たり、マンガを読んだりして毎日を送っているが、そうした中で屋外へ出ていくのは、けいこごとや学習塾へ通うときであろう。

都市では4割の子が塾通いをしているといわれるので、通塾していない子は6割になる。しかし、その子どもたちもけいこごとへ通っており、実際に何もしていない子は、多くても2割に達しないといわれる。

学習塾かけいこごとかはともあれ、誰かがどこかへ通っている。そして、自分が暇なときは誰かが忙しい。あるいは、誰かが帰宅すると、今度は自分が多忙になるという感じでスケジュールのいれちがいが生ずる。そうなってしまうと、友だちと遊びたいと思っていても、友だちを見つけることができないので、結局ひとりで家の中にいる形になりやすい。

しかも学習塾はともあれ、けいこごとは小学校低学年でもやっているから、そうした生活が幼い頃からずっと続いていく。そうなると、友だちを持たない暮らしがあたり前になり始める。どう考えても、いるかいないかあてに

ならない友だちを求めるより、テレビを見ていたほうがましだという気持ちになる。そうなると自然とのふれ合いに欠けるだけでなく、友だちとの交流も乏しく、家の中でテレビかマンガを見るという遊びのスタイルが定着する。それが、すでにふれたような「群れ」から「孤立」への遊びの変化をもたらすのであろう。

発達心理学のテキストなどによればギャング集団への帰属は、児童期の後半を特性づけるものといわれる。ところが、これまで述べてきたように日本の子どもたちはギャング集団を持っていない。そうだとすると、これまでの学説が誤っていたか、それとも日本の子どもの成長が歪みを持ち始めたかのいずれかになる。

そこでここ数年、年に何回か海外を訪れ、子どもたちの生活ぶりを探る調査を行ってきた。韓国へ行くと、子どもたちが路上で紙メンや石けりをしていたし、マニラの子どもは上半身はだかになって鬼ごっこをしていた。そして、シアトルやサンフランシスコ郊外でも、ボール投げやローラースケートをしている子どもの姿があった。さらに、パリの路地裏へ入るとなにやら悪さしている子どもたちの群れがあった。

こうしたことは、調査をするまでもなく、それぞれの国へ行き市場や広場を歩けば、見るつもりはなくとも目にとまる光景である。したがって少なくとも日本以外の国では、程度の差こそあれ、子どもたちのギャング集団は生きつづけている。そうだとすると、日本の子どもだけがギャング集団を持たずに成長している計算になる。

遊びの持つ意味

そこで問題となるのは、ギャング集団が子どもの人間形成にどのような意味を持っていたのかであろう。ギャング集団の消滅した現在、その機能を考えるのはなくした子の年齢を数えるのにも似たむなしさを感じるが、問題を考えるために、ギャング集団へ帰属することの意味を洗い出してみる必要があろう。

やや考察の観点をかえてみよう。かつてのギャング集団は、鬼ごっこやかくれんぼなどの群れ型の遊びを媒介として成立していた。そしてその遊びが、子どもの人間形成に多くの役割を果たしていたといわれる。具体例をあげるなら、

(1) 身体が丈夫になる
(2) 友だちづき合いの仕方を覚える
(3) がまん強さが身につく
(4) 創造性が芽ばえる
(5) 精神的に安定する
(6) やる気が強まる

などであろう。かくれんぼに例をとれば、たくさんの仲間(2)と、体を動かしながら(1)、じっとかくれたり(3)、かくれる場所を探したり(4)しているうちに、精神的にすっきりとした気持ちになり(5)、意欲が育ってくる(6)、というあんばいである。

このように、ひとつの遊びを通してたくさんの効用を期待できる遊びを「豊かな遊び」と名づけてみたい。そうすると、かつての群

れ型の遊びが「豊かさ」に象徴されるのに対し、現代の遊びは室内で孤立型のものが多いから、(5)の「精神的な安定」くらいしか期待できない「貧しい遊び」となる。

換言するなら、かつての遊びはバランスのとれた総合栄養剤のように、ひとつの遊びの中から多くのエキスを吸収できた。したがって、元気に遊ぶのはよい子というのも可能だった。しかし、そうした豊かさが失われた現在、子どもたちは貧しい遊びの中で時を過ごしているのにすぎず、遊びは人間形成にプラスしていない。

考えてみると、遊びは子どもの成長につれて変化していく。つまり、幼稚園の頃のままごと遊びから始まって、小学校低学年でのかくれんぼや鬼ごっこを経て、中・高学年でのチャンバラ、そしてスポーツへという軌跡を描く。学年が上がるにつれて、遊びに参加する人数がふえるだけでなく、ルールのむずかしさが増し、参加するための技能水準も高まってくる。したがって成長とともに身体、そして精神的な面でも発達していくのが子どもとしての遊びであったのに、テレビやマンガを見ているのでは、遊びが発達してこない。こうした面からみても、現代の遊びが貧しいのは否定できないように思える。

メカニックな友だちに囲まれて

いずれにせよ、ギャング集団はすでに崩れ去り、現在の子どもたちは遊びを持てないだけでなく、友だちを持つことも少ない。したがって、子どもたちの多くは友だちという言葉に、「クラスの仲良しの子」を連想する。いうまでもなく学級は人為的に作られた集団であるうえに、在校時間だけのふれ合いにすぎない。そのうえ学級の多くの時間は授業に費やされるから、友だちとしての接触は、休み時間か、授業の始まる前か後に限られてくる。しかしすでにふれたように、ギャング集団を持たない現在の子どもにとって、クラスメートとのつき合いが、友だちとふれ合う唯一の場となりつつある。しかも同一学年でもクラスが違うと、そして同じ組でも性が異なると、さらに同性でも気が合わないと、話をかわす割合が少なくなる。もちろん学級が替わると、去る者は日々にうとしと、仲の良い友だちとの縁も切れる。

こうした子どもたちの友だちづき合いの姿は、おとなたちが会社の同僚ととりあえず、表面上にこやかにつき合うのに似ている。全人的につき合うのでなく、時間を共有している間、心の奥底をかくしつつ表向きをつくろう形である。こうした状況では、友だちを信じる心など生じてきそうにない。

事実、この数年、友だちを求めようともせず、孤独になれた子どもが増加している。もちろんこうした子とて、寂しさを感じることもあろう。そうしたときは、マンガ雑誌のページをめくるか、テレビのスイッチをつけ、お笑い番組でも見ればよいのである。とりあえずマンガやテレビが、心の傷をいやしてくれるからである。

さらに、テレビゲームの開発は、子どもたちの友だち不在に拍車をかけたような印象を

つける。つまりテレビやマンガにあきた子どもたちが、今度はテレビゲームにチャレンジをする。困ったことにテレビゲームは裏わざを研究していたりすると、あっという間に何時間かすぎる。そうなると子どもたちはなおのこと、友だちを持たない状況に慣れ、寂しさを感じなくなる。

そして、子どもたちが中学へ入り中学生になると、深夜放送を聞く子どもが増加してくる。彼らもパーソナリティの語りかけがまやかしで、聞き手と話し手のかもしだすふれ合いのムードが虚像であることは知っていよう。しかしそのほかに友だちを求められないとしたら、虚像と知りつつもパーソナリティの語りに心のやすらぎの場を見いださざるを得ない。そうした意味ではテレビやマンガやラジオは、子どもたちにとっての友だちなのかもしれない。孤独な子どもたちがマスメディアの中に、心の友を求めようとしている。身近な世界に人間的な絆を見いだせず、人工的なマスメディアの世界に、人工的な友だちを求める。アメリカの社会学者・リースマンのいう「孤独な群衆」という言葉が、実在感を持って迫ってくるのを感じる。しかもリースマンの描いたのは、おとなの世界であったのに、子どもの世界にそうした傾向が及んでいる。

このところ、「いじめ」のように、これまでの基準ではわかりにくい逸脱行為が増加している。また青少年の非行は、戦後第三のピークを迎えたといわれる。そうした異常な出来事の中に、子どもたちの耐性のなさを感じることが多い。マスメディアとのふれ合いに心のやすらぎを求めていた子どもが、極限状況に達してカタストロフィー状況（破局）を迎える。しかし彼らは、友だちとのつき合いを持たないので、はけ口の求め方を知らず、ある面では幼稚な、そして半面では、おとな顔まけの行為へ走る。そう考えてくると逸脱行動へ走りがちな子どもも、友だちを持たずに育つという異常な環境の生んだ被害者といえなくもない。

そうした意味では、平凡なことながら友だちを持つことの大事さを痛感する。放課後、家へ帰って友だちと遊ぶ一刻を持つ。そうした願いは、決して無理なものでもあるまい。しかし子どもたちがそうした自然の中での成長スタイルを持てなくなってすでに20年がすぎ、ギャング集団を失った子の一期生は大学を巣立っている。そうした意味で、歪みを伴った成長がそういう結果をもたらすが、その具体例が若者たちの変容の形であらわれてくる可能性が強い。

調査レポート

中学生の友だち感覚

放送大学客員教授

深谷昌志

本報告書の要約

① 親しい友だちの数

5人以下（20.3%）から31人以上（15.0%）まで、生徒たちがイメージに持つ友だちの数は幅が広い。(P. 13表1)

② 友だちとしていること

いっしょに登下校し、ともに部活動をしている。そうした接触量の多さを媒介として、友だちができる。(P. 17図2)

③ よい友だちの条件

親切で、しっかりとしていて、勇気のある人がよい。(P. 19図3)

④ 友だちとうまくいかなくなるとき

大切な約束を守らずに秘密を他人に話してしまったとき、友だちでなくなる。(P. 21図4)

⑤ 友だちにしていること・してもらうこと

全体として、友だちにしてあげるより、してもらうことのほうが多い。(P. 22図5)

⑥ 友だちの数と性差

男子の45.8%は友だちが20人以上いると答えているが、女子は19.3%で、女子のほうが友だちが少ない。(P. 25図6)

⑦　話していることと性差

男子と比べ女子は、友だちとあれこれとうわさ話をするのが好き。(P. 26図 7)

⑧　親しい友だちと性差

女子はいっしょにいると楽しいというようなふれ合いの要素を大事に考えて、友だちを選んでいる。(P. 27図 8)

⑨　理想の友だちの数

友だちの多い子は友だちの多いほうが理想的だといい、友だちの少ない子は少ないほうが望ましいと答えている。(P. 31表 9)

⑩　学校の楽しさと友だちの数

友だちの多い生徒のほうが、学校に楽しみを見いだすことが多い。(P. 36図12)

⑪　自己像と友だちの数

友だちの多い子は、体育祭や文化祭にはりきる、マンガのうまい明るい子である。
(P. 39図15)

⑫　友だちの数の推移

友だちの多い生徒は小学生の頃から友だちが多く、それと同じに友だちの少ない子も、子どもの頃から友だちが少ない。(P. 40表20)

まとめ

中学生たちが、友だちは20人以上いると答えているのが印象的であった。親しい友だちとふつうの友だちとの境目があいまいになり、どちらかというと、ふつうの友だちを友だちと思っている生徒が多いような印象を受けた。

つまり、生徒たちはたくさんの仲間と表面的に浅くつき合う形の友だち関係を持っている。しかしつき合い方が深みに欠け、悩みなどを持ったときに語り合う友だちがいないのではないかと思う。

軽く、浅く、広くつき合うのはよいが、それはクラスメートとしてのつき合いで、それと友だちとは異質なのではないか。そうした意味では、心の友を持たないのが、現代の友だち関係のように思える。

〔調査概要〕

対象●宮城県・山形県・新潟県・東京都・兵庫県の公立中学校6校の1～2年生1,417名

期間●1988年9月～10月

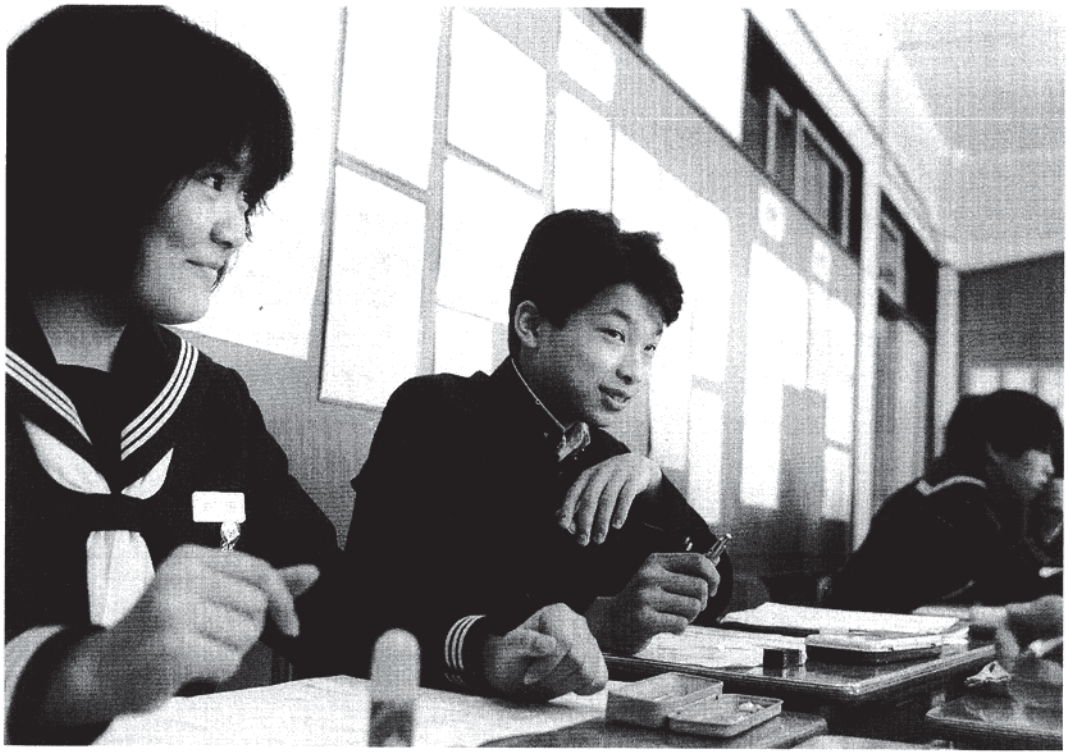
方法●学校通しの質問紙調査

サンプル構成

(人)

学年＼性別	男　子	女　子	計
中1	433	412	845
中2	312	260	572
計	745	672	1,417

第Ⅰ章 テーマ設定とサンプル



1．友だちのとらえ方

学校の中で中学生を見ていると、折あるごとに友だちとしゃべっている。だまっているのはほんの一時で、放っておけば、いつまでもしゃべっている。

中学生はそういうものだという気もするが、友だちを大事にしているように見える反面、友だちがつねに変わる子が少なくないし、友だち思いという行為を見かけることもへった印象を受ける。

表面的にあれやこれやとしゃべっているが、なんとなく友だちづき合いの深みに欠ける。つまり、量的に広がっている反面、質的な深まりに乏しい。それが、現代の友だち関係のように見える。

そこで中学生たちの抱く友だち観を調べることにしたのだが、正直にいって、友だちについての調査はそれほどやさしくない。なぜならおとなの場合にしても、友だちと話しているといってもなんとなくその場の雰囲気でしゃべっているので、何をいつまでしゃべっていたかといわれても返事に困る。それに、なんとなく友だちがいるのはたしかだが、顔見知りと友だち、そして親しい友だちとの境目がどういう理由から、どこで成り立つかといわれてもきちんと答えにくい。

友だちとは、いわば本人の心のうちの問題なだけに、実態をとらえにくい。そして無理に客観化してとらえようとすると、たしかに

数値は得られるものの、実態とずれている。あるいは、なんとなくうそっぽい感じがする。

そうした意味で、友だち関係の調査はアンケートになじみにくいテーマなのかもしれない。中学の先生方から話をお聞きし、何度となくプレテストを重ねてみた。その結果、巻末に付したような調査票が完成した。まだまだ不十分という気持ちもするが、現代の友だち関係の一端を明らかにできるのではないかと思っている。

2．サンプル構成

調査票の構成は巻末に付した通りだが、友だちと話していること、していること、あるいは友だちに望むこと、友だちをいやになるときなどをもりこむことにした。

調査は学校を通して、1988年9月～10月に実施した。調査に協力していただいたのは6校で、関西や関東、東北に及んでいる。しかし、学校差については別の機会に行うこととし、今回はくわしい考察を控えることにした。

なお、調査時期からいって受験を控えた中学3年生に調査の協力を求めにくかったので、サンプルは中学1～2年生に限られている。

第II章 友だちづき合いの姿

1．友だちとしていること

生徒たちは、何人の友だちを持っているのであろうか。「あなたは、親しい友だちを何人持っていますか」について、**表1**のような結果が得られている。

さすがに友だちのいない子は0.7％にすぎないが、親しい友だちが3～4人（9.3％）という子から31人以上（15.0％）まで、友だちの幅が大きいのが目につく。親しい友だちが20人以上と答えた子が33.2％に達しているのをみると、生徒たちが友だちと顔見知りとをどう区別しているのかと思う。

そこで、もう少しくわしくタイプを分けて友だちについてたずねてみると、**表2**のような数値となる。友だちのほとんどが同じクラスの子か、同じ部活動の子であるのがわかる。もっとも学校の中で、友だちとつき合える機会が、同じクラスか部活動に限られているのは当然のことなのかもしれない。

それでは、生徒たちは親しい友だちとどのような話をしているのであろうか。**図1**のようによく話をしているのは、部活動や同級生のうわさのような、いわば身内の話と好きなテレビやマンガのようなマスメディアとのかかわりに関するものに二分されている。

もっともテレビやマンガについての話といっても、あれが好き、あるいは嫌いといっているのであるから、マスメディアというより自分の好みについて、友だちとたわいもない

うわさ話をしていると考えるのが妥当なのかもしれない。

しかし**表3**によると、友だちと話している内容に、進路によって違いがあるのが目につく。つまり、短大や専門学校への進学を考えている者はテレビやタレントのうわさ話に多くの時間を費やしている。それに対し、むずかしい大学を目指そうとしている者は、友だちとテストの点数や将来の進路などについて話していることが多い。むずかしい大学を望んでいるような生徒にとって、勉強の重みが大きいのであろう。

それでは生徒たちが友だちと何をしているのかをたずねると、**図2**のような結果が得られる。いつものようにしているのは「登下校をいっしょに」「部活動の練習をいっしょに」そして、「家の行き来」だという。学校の登下校がいっしょならば、親しくなる機会が増加しよう。

しかし図2によれば、勉強をいっしょにしたり、テストを見せ合うなど、人間的なふれ合いが思っているより行われていない印象を受ける。

したがって、友だちとのうわさ話をしながら登下校をするなど、ふつう程度のつき合いを行っているのはたしかだが、それ以上深いつき合いに欠ける。中学生ならば、友だちともう少し密接なつき合いをしてもよいように思う。

（表1）親しい友だちの数

→友だちの数に幅がある

（%）

0～5人	0人	0.7	20.3
	1人	1.1	
	2人	2.4	
	3人	4.4	
	4人	4.9	
	5人	6.8	
6～10人	6～7人	11.5	29.9
	8～9人	7.0	
	10人	11.4	
11～19人	11～14人	8.1	16.6
	15人	4.8	
	16～19人	3.7	
20人～	20人	6.9	33.2
	21～25人	5.3	
	26～30人	6.0	
	31人～	15.0	

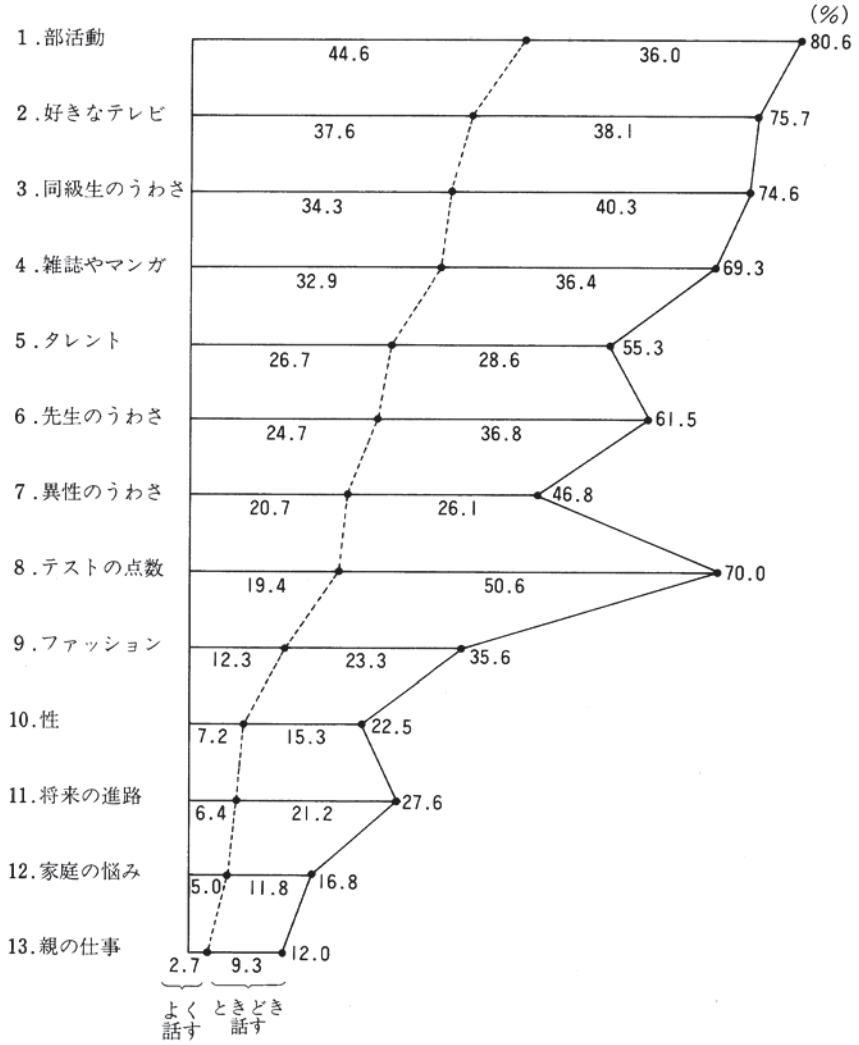
（表２）親しい友だち

（%）

<table>
<tr><th></th><th>同じ
クラスの人</th><th>同じ学年の
クラスの
違う人</th><th>違う
学年の人</th><th>同じ
部活動の人</th><th>同性の人</th><th>異性の人</th></tr>
<tr><td>0 人</td><td rowspan="3">22.8</td><td rowspan="3">25.0</td><td>70.1</td><td rowspan="2">25.6</td><td rowspan="3">20.8</td><td>78.7</td></tr>
<tr><td>1 人</td><td rowspan="2">0.0</td><td rowspan="3">10.2</td></tr>
<tr><td>2 人</td><td rowspan="2">22.8</td></tr>
<tr><td>3 人</td><td rowspan="2">24.4</td><td rowspan="2">20.1</td><td rowspan="3">16.5</td><td rowspan="3">15.6</td></tr>
<tr><td>4 人</td><td rowspan="3">25.7</td><td rowspan="6">11.1</td></tr>
<tr><td>5 人</td><td rowspan="3">24.9</td><td rowspan="3">22.5</td><td rowspan="4">13.4</td></tr>
<tr><td>6 人</td><td rowspan="2">26.5</td></tr>
<tr><td>7 人</td><td rowspan="3">25.9</td></tr>
<tr><td>8 ～10人</td><td>12.0</td><td>13.9</td></tr>
<tr><td>11～19人</td><td rowspan="2">15.9</td><td rowspan="2">18.5</td><td>14.6</td></tr>
<tr><td>20人～</td><td>22.5</td></tr>
</table>

（図１）親しい友だちと話していること

└──→パーソナルとマスメディア



（表３）親しい友だちと話していること×進路

└──→進路に対応した話題

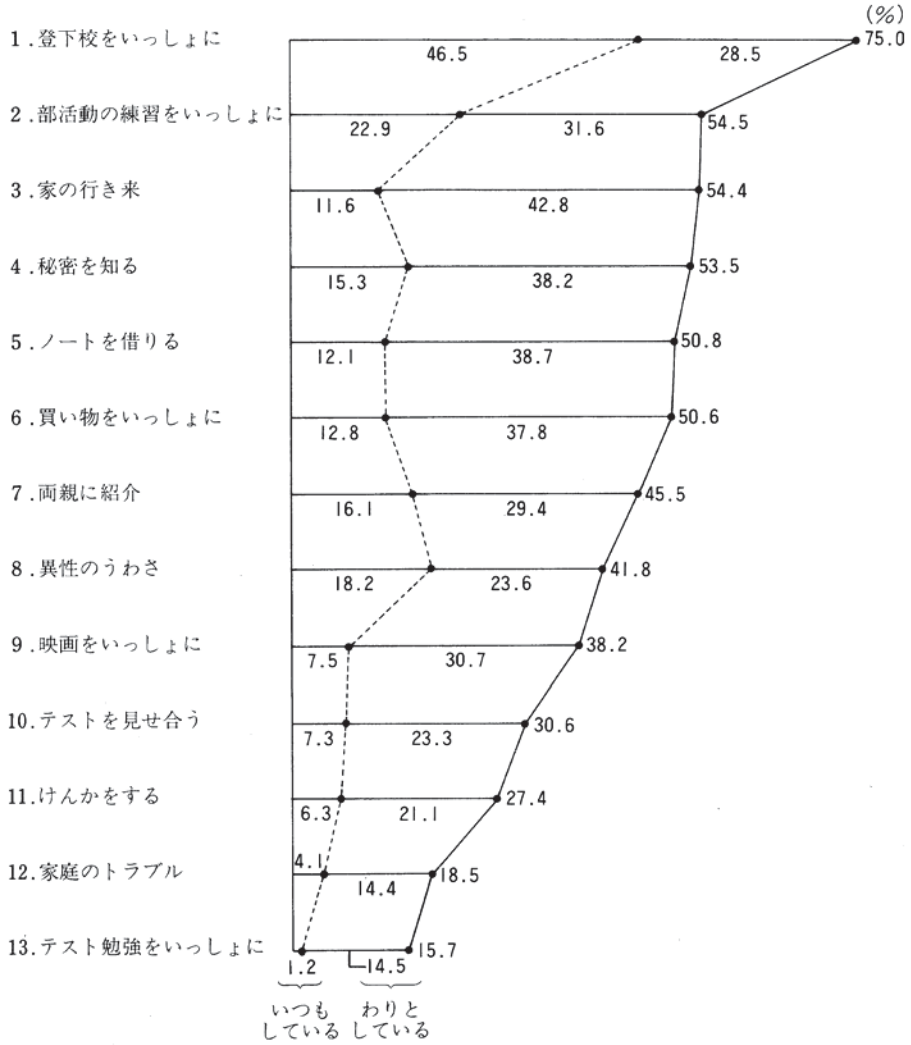
（%）

	高　校	短大・専門学校	まあまあの大学	むずかしい大学
1．部活動	37.5	50.3	46.8	44.9
2．好きなテレビ	34.4	39.7	39.0	34.6
3．同級生のうわさ	31.7	40.2	30.9	40.2
4．雑誌やマンガ	28.6	32.8	35.0	37.4
5．タレント	21.8	37.1	23.3	20.6
6．異性のうわさ	15.0	26.1	20.3	24.8
7．先生のうわさ	22.0	26.4	26.0	26.2
8．テストの点数	15.3	18.2	22.4	25.5
9．性	5.2	7.4	7.9	12.6
10．ファッション	11.2	16.2	8.8	12.3
11．将来の進路	5.4	7.7	4.4	12.3
12．家庭の悩み	4.4	6.2	4.9	2.8
13．親の仕事	1.2	3.0	3.5	1.9

「よく話す」割合

（図２）親しい友だちとしていること

└──→いっしょに登下校、そして部活動



2．よい友だちの条件

それでは生徒たちは、どういう友だちを望んでいるのだろうか。**表4**によれば、「誰にでも明るく声をかけ」、「勉強が得意で」、「スポーツのうまい」子と友だちづき合いをしたいという。

たしかにそうした子が友だちとして望ましいのはいうまでもないが、実際に、それほど明るくなく、そしてスポーツも得意といえず、勉強面でも思ったほどの成果を出せないのが、ごくふつうの生徒たちであろう。そうした子は、友だちを見いだしにくいのであろうか。

そこで、「よい友だちとはどういう子」かをたずねてみた（**図3**）。「誰にでも親切で」、「しっかりとしていて」、「勇気があり」、そして「話を聞いてくれる」子が、よい友だちの条件だという。いわば、やさしくよくしてくれる友だちで、そうであれば「カッコのよさ」や「勉強ができる」、そして「スポーツがうまい」などは、それほど求めないと生徒たちは答えている。

もちろん友だちの条件は、生徒のタイプにより異なってくる。例えば**表5**に示すように、むずかしい大学への進学を望むような生徒は、「親切さ」と同時に、「勉強ができ」、「しっかりとしている」タイプの子を親しい友だちにしたいと思っている。それに対し、短大や専門学校への進学を考えている生徒は「芸能界にくわしい人」「おもしろい人」と、友だちになりたいという。こうした状況を手がかりとすると、生徒たちの友だち関係が、タイプによって異なってくるのがわかる。

いずれにせよ、子どもたちのつき合いは思

（表4）友だちになりたいか

→明るく、調子のよい子

（%）

	友だちになりたい			友だちになりたくない		
	とても	できたら	小　計	あまり	ぜんぜん	小　計
1. 誰にでも調子よく声をかける	36.9	(41.3)	78.2	17.3	4.5	21.8
2. 成績がよく勉強を教えてくれる	35.0	(44.7)	79.7	14.9	5.4	20.3
3. スポーツで活躍する	27.4	(50.2)	77.6	16.6	5.8	22.4
4. 冗談を言って笑わせる	27.1	(44.8)	71.9	23.0	5.1	28.1
5. ツッパっている	7.5	17.1	24.6	(45.9)	29.5	75.4

◯＝最大値

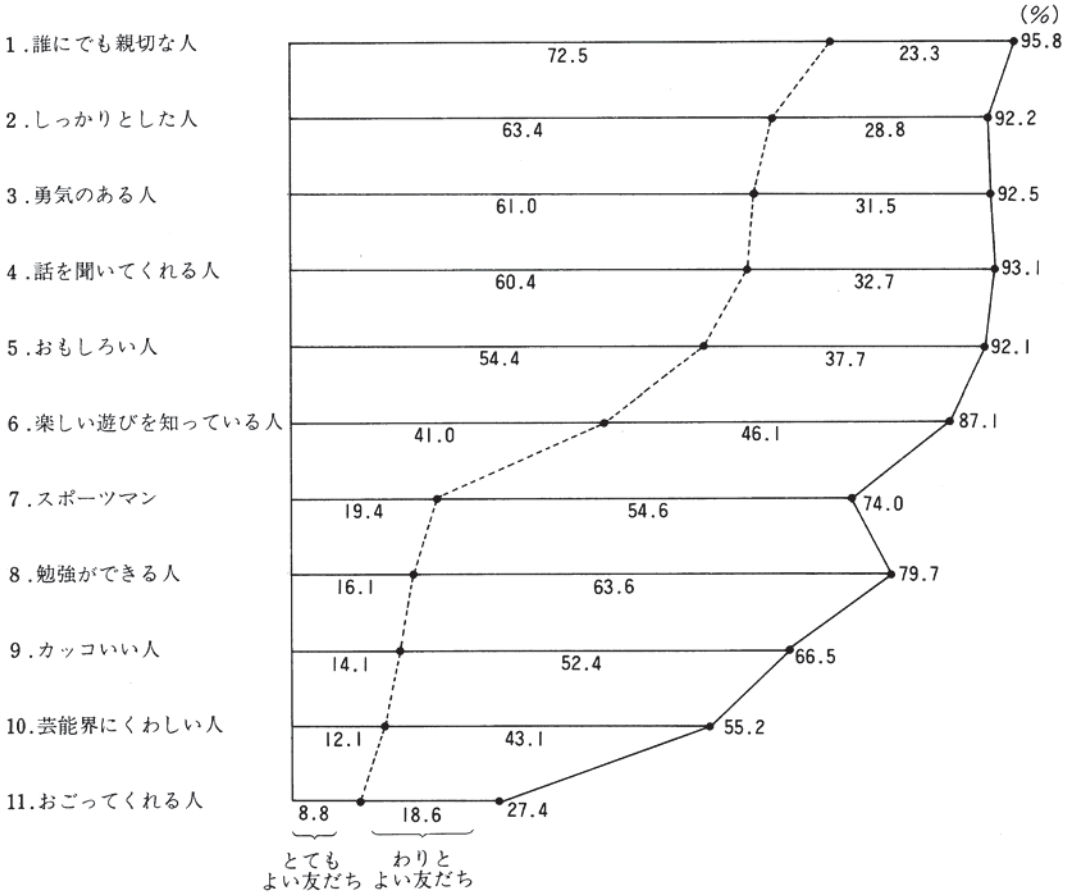
っているより浅く、表面的な印象を受けるが、それでは、友だちとうまくいかなくなるのはどのようなときなのか。

図4のように、「大切な約束を守らず」、「秘密を他人に話す」、そして「ウソをつく」などのときに、友だちを信じられなくなるという。

友だちのうわさ話をする間に、いろいろな秘密などを話すことも多い。それを、他人にしゃべってしまうような相手ではとても友だちといえないというのであろう。

（図3）よい友だちとは

→親切で、しっかりとした人



（表５）よい友だちの条件×進路

└──→進路に応じた友だち選び

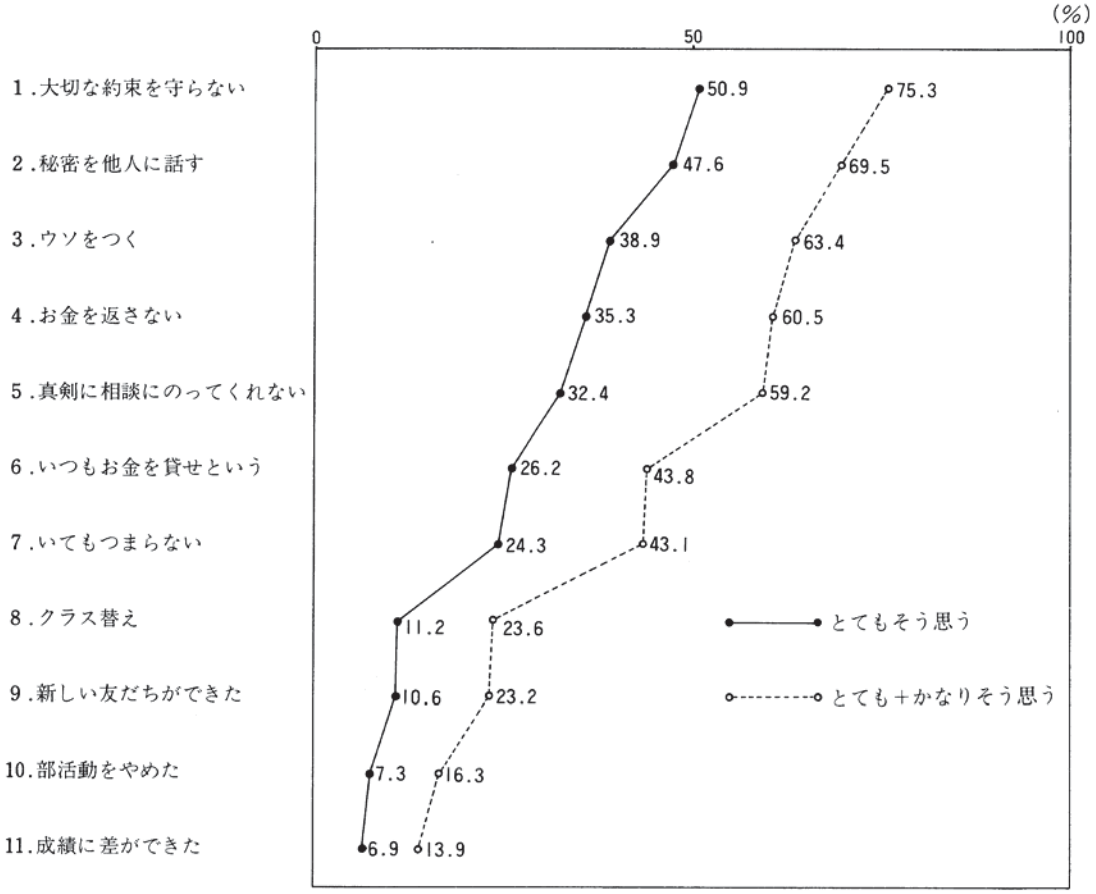
（%）

	高　校	短大・専門学校	まあまあの大学	むずかしい大学
1．誰にでも親切な人	68.1	76.5	71.0	80.0
2．しっかりとした人	55.9	69.7	62.2	84.5
3．勇気のある人	56.9	67.3	59.5	66.0
4．話を聞いてくれる人	51.2	67.8	59.5	69.8
5．おもしろい人	52.9	60.1	52.5	55.7
6．楽しい遊びを知っている人	42.9	41.3	38.4	44.4
7．スポーツマン	19.7	18.1	18.7	25.7
8．勉強ができる人	16.1	13.9	14.5	26.4
9．カッコいい人	15.8	12.7	12.8	14.2
10．芸能界にくわしい人	13.0	13.7	8.8	11.2
11．おごってくれる人	13.4	5.0	7.6	9.4

「とてもよい友だち」の割合

（図４）友だちとうまくいかなくなるとき

→約束を守らず、秘密をもらす



3．友だちにしてあげること・してもらうこと

こう見てくると、友だちとは自分のまわりにいて、緊張を解いてくれる対象なのであろう。そこで**図5**のように、友だちがしてくれることと友だちにしてあげることとに分けて、友だち関係を調べてみた。つまり、友だちに自分から働きかけるのと、友だちのほうから自分へ働きかけてくれるのと、どちらのほうが多いのかを調べようとしたのである。

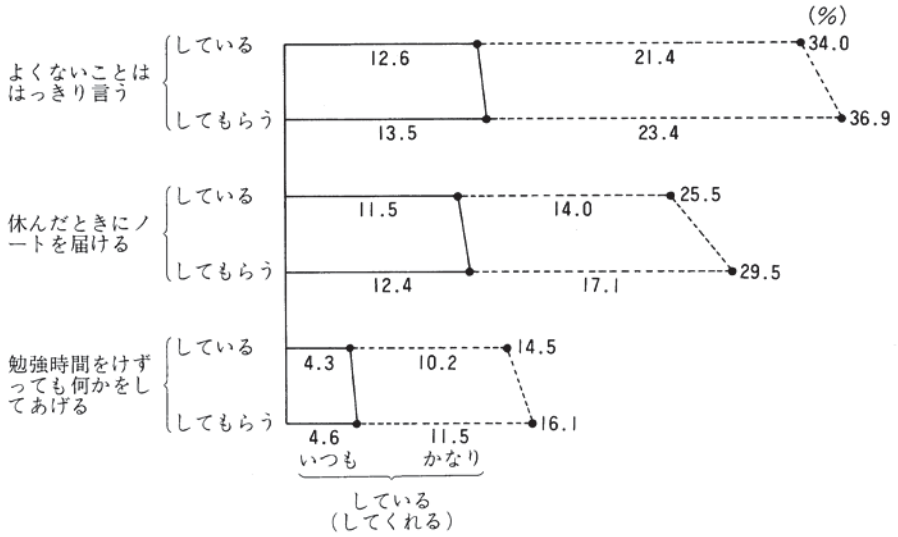
「自分から友だちへ」と「友だちから自分へ」との割合は、思ったより差が開かなかった。したがって、友だちから「してもらう」程度には友だちへ「している」感じなのであろうが、それでも「している」より「してもらう」割合が心もち多いように見える。「休んだときに友だちの家へノートを届けに行く」のが「いつも」に「かなり」を含めて25.5％なのに対し、「ノートを届けてもらう」が29.5％である。したがって現在の生徒たちは、少なくとも友だちからしてもらっている以上には、自分から友だちへすることはない。というより、やや図式化するなら、してもらっているのに比べ、している割合が少ない。つまり自分からするというより、やはり友だちからしてもらう形の友だち関係のように見える。

もっとも**表6**によると、生徒たちは自分は、友だちから自分を選んでもらうというより、自分から友だちを選ぶタイプだと答えている。換言するなら、「してもらう」より「してあげる」タイプだという。たしかに気持ちの面ではそうなのだろうと思うが、実際には生徒たちの考えているほど、自分のほうから働きかけていないのは、すでにふれた通りである。

そこであらためて、親しい友だちとはどういう条件なのかを調べてみると、**表7**のように「いっしょにいると楽しい」「困っていることを話しやすい」、そして「なんとなく気が合う」人だという。とにかくなんとなく気が合うから、いっしょにいると楽しい。そして、ときには悩みを話し合ったりする。いわばそうした空気のような存在が、生徒にとっての友だち関係なのであろう。

（図5）友だちにしていること・してもらうこと

→してもらっていることが多い



（表６）友だちを作るタイプ

└──→自分から友だちを作るほう

（%）

	自分から友だちを		相手から友だちに	
	作　る	とちらかといえば作る	どちらかといえばなる	な　る
男　子	21.3	50.0	25.5	3.2
	71.3		28.7	
女　子	23.8	42.6	30.4	3.2
	66.4		33.6	
全　体	22.5	46.4	27.9	3.2
	68.9		31.1	

◯＝最大値

（表７）親しい友だちの条件

└──→いっしょにいるのが楽しく、気が合う友だち

（%）

	大　事			大事でない	
	とても	かなり	少　し	あまり	まったく
1.いっしょにいると楽しい	62.0	22.6	11.8	2.7	0.9
	84.6			3.6	
2.困っていることを話しやすい	57.7	23.0	11.1	5.1	3.1
	80.7			8.2	
3.なんとなく気が合う	40.4	34.4	19.7	4.7	0.8
	74.8			5.5	
4.親切にしてくれる	41.0	30.2	20.4	6.3	2.1
	71.2			8.4	
5.秘密を話し合う	21.5	16.6	25.6	21.0	15.3
	38.1			36.3	
6.同じ部活動	19.7	14.0	23.1	26.3	16.9
	33.7			43.2	
7.趣味が同じ	11.1	20.9	43.5	19.4	5.1
	32.0			24.5	
8.成績が同じくらい	6.8	9.7	26.4	35.0	22.1
	16.5			57.1	

◯＝最大値

第III章 友だちづき合いの性差

1．女子の友だちづき合い

これまで、中学生の友だち関係を概観してきた。しかし学校内での生徒たちの友だちづき合いを見ていると、男子と女子とでは友だちの持ち方が違うのが目につく。男子たちはたくさんの子が群れをなして一団となっているのに対し、女子のグループは小さくまとまり、学級の中に3～4の小グループがある感じである。

実際にも**図6**が示すように、男子の中の45.8%、つまり半数の子は、友だちの数は20人以上だと答えている。ということは、仮にクラスが40人学級だとすると、男子はその半分の20人になるので、友だちが20人という答えは、同性のクラスメートはみんな友だちと思っている計算になる。それに対し女子の場合、友だちが6～10人が37.6%と、もっとも割合が多い。したがって、たくさんの友だちの中に身を置くのが好きなのが男子であるのに対し、女子は限定したグループの中でのつき合いを好むと要約できよう（**表8**）。

そして友だちと話していることについては、異性のうわさ話をしている割合が女子が30.3%なのに対し、男子は12.1%にとどまっている。そのほか先生やタレントのうわさ話も、男子より女子のほうが多くしているなど、女子のほうが雑談好きとの結果が得られている（**図7**）。

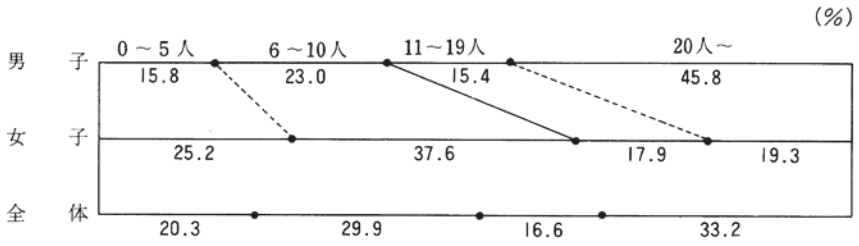
そして、親しい友だちの条件についても**図**

8のように、「いっしょにいると楽しい」をあげる者が女子は73.1%、男子は51.9%と、2割以上の開きが認められる。したがって気の合う数人の友だちとあれやこれやとしゃべり合うのが女子の友だちづき合いなのに対し、男子の友だちはむずかしいことをいわずに、とにかくたくさんの友だちと群れている性質のものなのであろう。

このようにみてくると、男子よりも女子の友だち関係のほうがグループが限定され、そして、そうした中での友だちづき合いも深いような印象を受ける。そして**図9**のように「休んだときにノートを届ける（あるいは、届けてもらう）」についても、男子よりも女子は、してもらったり、してあげる割合が高い。

（図6）親しい友だちの数

→女子は少数の友だちと深く



（表8）性差×友だちの数

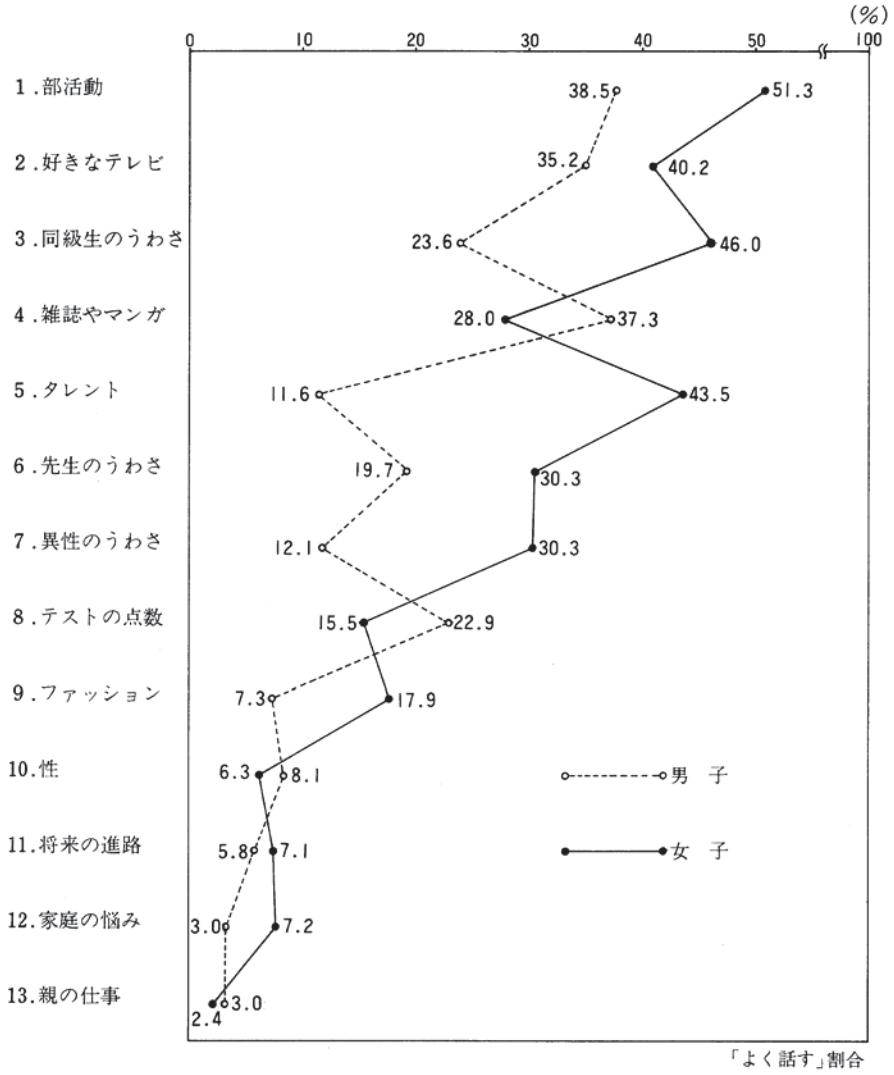
→男子は友だちが多い

(%)

	0～5人	6～10人	11～19人	20人～
男　子	15.8	23.0	15.4	45.8
女　子	25.2	37.6	17.9	19.3
全　体	20.3	29.9	16.6	33.2

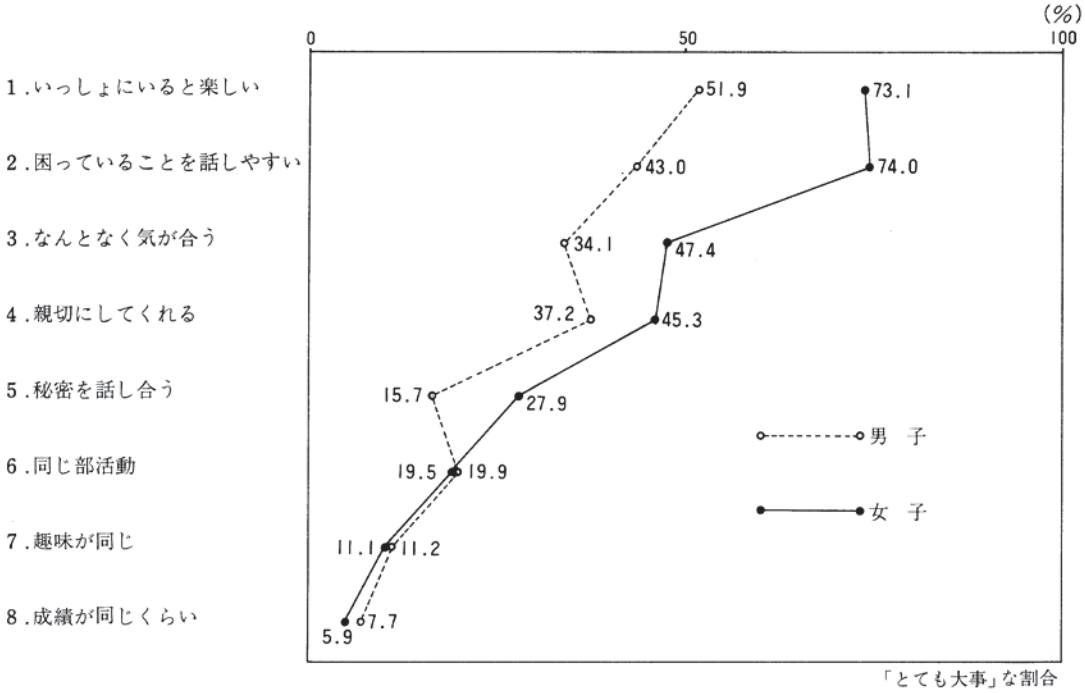
（図７）親しい友だちと話していること×性差

└──→女子のほうが話しずき



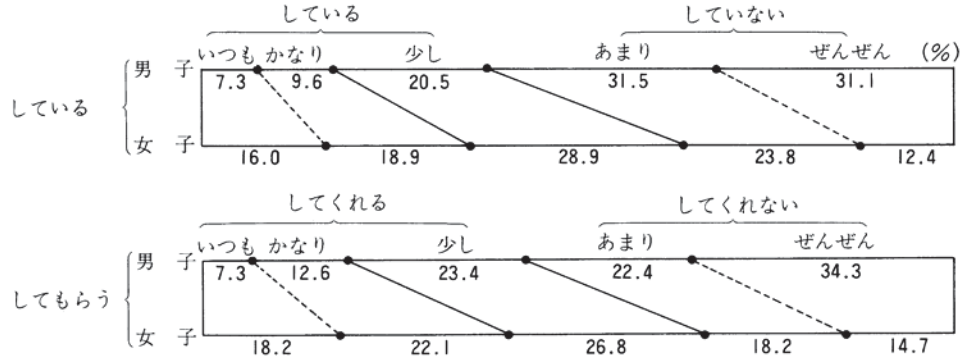
（図８）親しい友だちの条件×性差

└──→悩みを話す女の子たち



（図９）休んだときにノートを届ける×性差

└──→女子のほうが密度が濃い



2．友だちについての男女の開き

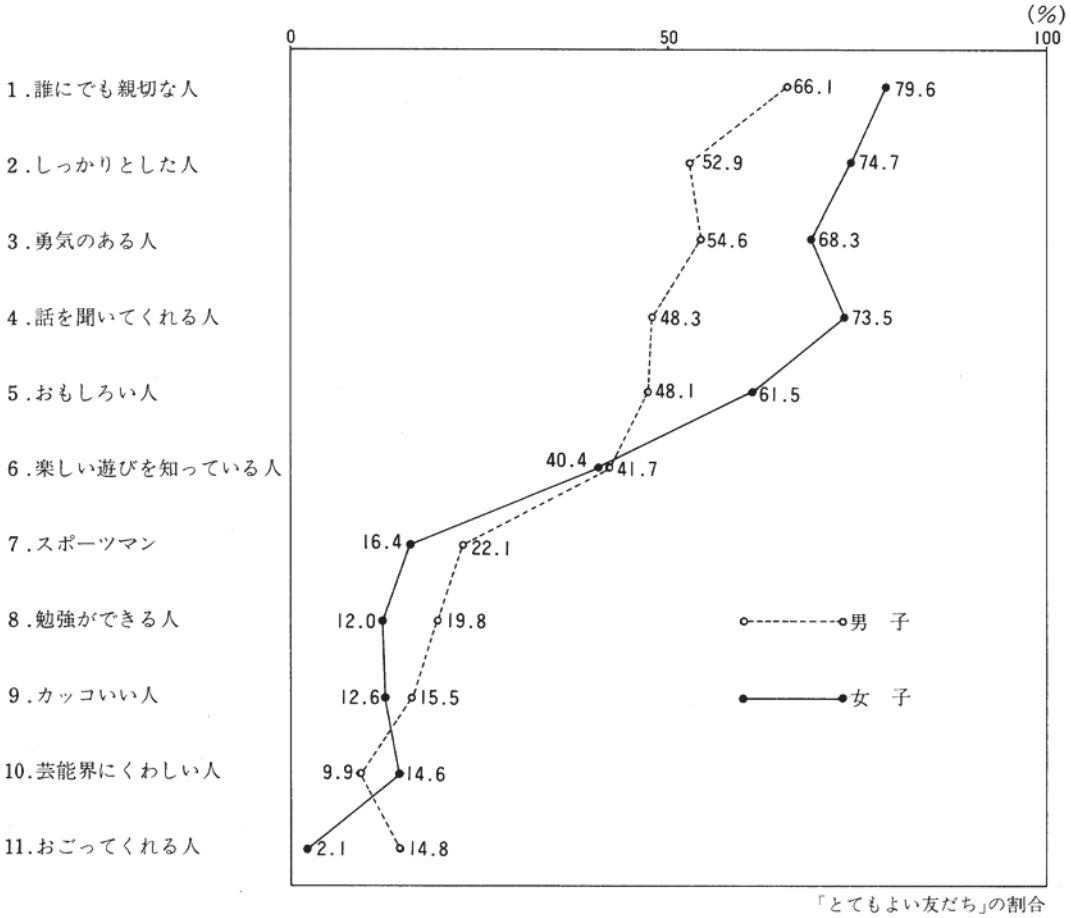
してもらったり、してあげたりする。そうした割合が多いのが友だち関係として望ましいかどうかは友だち関係の質にかかわる問題で、それほど容易に結論を出しにくいようにも思う。それにしても男子の友だちづき合いは、女子と比べ淡白な印象を受ける。

そうした友だちづき合いの密度を反映してか、よい友だちとは何かについて女子は、「誰にでも親切な人」「しっかりとした人」「話を聞いてくれる人」などをあげているのに対し、男子は「スポーツマン」や「勉強ができる人」「カッコいい人」などの条件をあげている（**図10**）。

男子のほうが生徒の持つ属性などに着目し

（図10）よい友だち×性差

→女子のほうが友だち関係が密



「とてもよい友だち」の割合

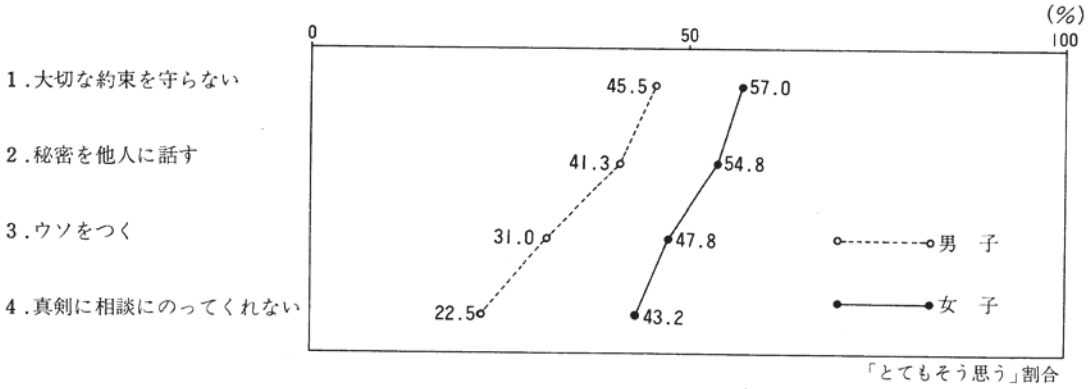
ているのに対し、女子は情緒的に話を聞いてくれ、悩みを話しやすいなどを理由として友だちを選択しているのがわかる。

そして女子の場合、友だちとの接触がこまやかなので、それだけに友だちに対する注文もむずかしくなる。例えば**図11**のように、「大切な約束を守らない」や「秘密を他人に話してしまう」に対し、そうなったら友だちとうまくいかなくなるという割合は、男子より女子のほうが高い。

このところ生徒たちの友だちづき合いの中で、「絶交」という言葉を聞かなくなった。友だちづき合いが広く浅くなるにつれて、絶交などという感覚は、重々しく、カッコがよくないのであろうか。それでも図11の結果では男子よりは女子のほうに、絶交に似た雰囲気が残っているように見える。

調査データなどの面では、性差の縮小が目につく。そして、着ている物や持ち物の面でモノセックス化が顕著である。しかし本号で分析対象としている友だちづき合いについては、男女の差は著しい開きを示した。

（図11）友だちとうまくいかなくなるとき×性差



第IV章 友だちの多い子・少ない子

1．友だちの多い子のつき合い方

これまでふれてきたように、現代の友だち関係は浅く広くなっていて、かつてのように限られた友だちと深くつき合う形は薄れている。

軽さ感覚の友だちづき合いなのであるから、友だちを狭く限って、その友だちと深くという重々しい友だち関係はナウくないのかもしれない。

そう考えてくると友だちの数が、友だち関係を考える際の重要な要素となっているのがわかる。

そこで以下、友だちの数の多い少ないが、生徒の友だち関係にどのような影響を与えるのかを調べてみたい。**表9**は、実際の友だちの数と理想とする友だちの数との関連を示している。そしてこの結果によると、友だちが少ないグループの子の57.7%は、理想の友だちの数は4人以下だと答えている。それに対し、友だちが20人以上いる子の場合、理想の友だちの数が4人以下というのはわずかに5.7%で、67.2%とほぼ3分の2の者が、友だちは多いほうがよいと答えている。

したがって、友だちの少ない子は友だちを限定したつき合いが望ましいと思い、少ない友だちと深くつき合っているのに対し、たくさんの子とつき合っている子は、そういう形が友だちづき合いの理想の形だと思っているのがわかる。

そして、友だちの作り方については**表10**のように、友だちの多い子は自分から友だちを作っていくタイプのように見える。いわば、明るく積極的な子で、それに対し、友だちの少ない子はやや消極的で、受身のタイプという感じを受ける。

そうした友だちとのつき合い方を、友だちの数に関連させて分析してみると、**表11**のように友だちの多い子は「部活動の練習をいっしょにしたり」、「家の行き来」をしている割合が高い。

しかし全体としてみると、友だちが多い少ないと友だちとの接触との間には、それほど大きな差が認められない。つまり、形式的にみると友だちが少ないから深くつき合うとか、逆に、多い友だちと群れをなしてひんぱんに会うというような関係を見いだしにくい。

そして**表12**でも、休んだときのノートの届け方についても、友だちが少ないからといって、特にノートを届ける割合が多いとはいえ

（表９）理想の友だちの数×友だちの数

└──→実際の友だちの数に応じて

（%）

友だちの数＼理想の友だちの数	0～4人	5～9人	10～19人	20人～
0～5人	(57.7)	31.3	8.7	2.3
6～10人	23.6	(36.6)	32.1	7.7
11～19人	8.3	21.2	(43.3)	27.2
20人～	5.7	9.2	17.9	(67.2)

◯＝最大値

（表10）友だちを作るタイプ×友だちの数

└──→友だちの多い人は自分から作る

（%）

	自分から友だちを		相手から友だちに	
	作る	どちらかといえば作る	どちらかといえばなる	なる
0～5人	16.8	44.5	(32.4)	6.3
	∧		∨	
6～10人	19.0	46.8	31.9	2.3
	∧		∨	
11～19人	23.7	47.0	26.5	2.8
	∧		∨	
20人～	(28.7)	46.0	22.5	2.8

ないように見える。

したがって、少なくとも量的に把握した場合、友だちの少ないほうが友だちとのふれ合いが深く、それに対し、友だちの多いほうは浅くなるとはいいにくいように思える。

さらに、友だちについて大事にしていることと友だちの数についても**表13**の通りに、ほとんど有意な差を見いだしにくかった。

そして**表14**に、友だちの数と進路との関係を示したが、それほど有意な差が生じていないのは数値からも明らかであろう。

（表11）友だちとの行動×友だちの数

→部活動をいっしょに

（%）

	0～5人		6～10人		11～19人		20人～
1.登下校をいっしょに	41.3		49.4		48.4		48.4
2.部活動の練習をいっしょに	19.9	＜	21.3	＜	24.8	＜	(26.3)
3.家の行き来	9.3	＜	9.7	＜	12.1	＜	(15.0)
4.秘密を知る	13.3		14.6		14.7		16.7
5.ノートを借りる	7.8		12.2		16.9		11.4
6.買い物をいっしょに	11.5		14.1		13.8		12.3
7.両親に紹介	16.9		17.1		17.3		14.7
8.異性のうわさ	17.8		20.0		19.3		16.0
9.映画をいっしょに	4.8		8.5		8.5		8.5
10.テストを見せ合う	7.8		5.7		5.8		8.5
11.けんかをする	5.2		6.4		5.8		6.5
12.家庭のトラブル	3.3		4.0		4.9		3.6
13.テスト勉強をいっしょに	0.7		0.7		1.3		1.8

「いつもしている」割合

(表12) 休んだときにノートを届ける×友だちの数

└──→ あまり関係はない

(%)

		している(してくれる)				していない(してくれない)		
		いつも	かなり	少し	小計	あまり	ぜんぜん	小計
している	0～5人	13.4	11.9	20.4	45.7	28.3	26.0	54.3
	6～10人	13.4	15.6	25.6	54.6	24.6	20.8	45.4
	11～19人	7.2	14.3	26.9	48.4	27.8	23.8	51.6
	20人～	11.2	13.0	24.2	48.4	31.0	20.6	51.6
してもらう	0～5人	10.4	15.3	22.0	47.7	25.4	26.9	52.3
	6～10人	17.1	15.8	23.9	56.8	19.6	23.6	43.2
	11～19人	9.9	16.6	29.6	56.1	17.9	26.0	43.9
	20人～	11.6	18.8	25.7	56.1	19.6	24.3	43.9

(表13) 大事にしていること×友だちの数

└──→ 大事にしていることに変わりはない

(%)

	0～5人	6～10人	11～19人	20人～
1.いっしょにいると楽しい	61.6	64.8	62.2	59.7
2.困っていることを話しやすい	61.3	59.5	63.8	52.0
3.なんとなく気が合う	41.5	43.4	40.0	38.7
4.親切にしてくれる	39.4	40.5	46.2	39.4
5.秘密を話し合う	22.1	20.2	22.8	21.2
6.同じ部活動	16.4	20.6	17.6	22.7
7.趣味が同じ	9.0	10.4	9.4	14.0
8.成績が同じくらい	6.3	6.2	5.4	8.5

「とても大事」な割合

（表14）進路×友だちの数

（%）

	高　校	短大・専門学校	まあまあの大学	むずかしい大学
0～5人	30.7	32.2	29.9	7.2
6～10人	24.4	38.1	31.0	6.5
11～19人	29.1	27.3	33.1	10.5
20人～	34.9	22.3	34.3	8.5

2．友だちの多少と自我像

こう見てくると、予想外なことに友だちが少ないからといってつき合い方が深まるわけではなかった。そうだとすると、友だちの多いほうが友だちづき合いがうまくいっているように思われてくる。

このサンプルの場合、部活動は**表15**のように半数を超える子が運動部に積極的に参加している。そして**表16**のように、友だちが20人以上いる子の65.7%は運動部に積極的に加わっている。換言するなら、友だちの多い子は運動部を通して、友だちを持っているといえよう。運動部ならば、友だちが多くても当然のように思える。

なお、テレビの視聴時間と友だちの数との関連を調べてみると、友だちの少なめの子はテレビを見る時間が短く、それに対し、友だちの多い子はテレビ視聴が長いという傾向が得られる（**表17**）。

友だちの多い子は人づき合いがよく、明るい子で、テレビなども見る機会の多い子なのであろうか。

そして**図12**によると、学校が楽しいと思う割合と友だちの数との関連について、やはり友だちの多い生徒のほうが学校が楽しいという結果が得られている。すでにふれたように、友だちの多い生徒は、運動部に積極的に加わり、友だちに囲まれて生活している。それだけに、学校が楽しいのも当然なのであろう。

もちろん学校といっても、楽しいのは授業なのでなく休み時間なのであろうが、**図13**（**表18**）が示す通り、友だちの多い生徒のほうが休み時間が楽しみだと答えている。友だちがたくさんいるから、休み時間に友だちと雑談をするのが楽しみなのであろうか。

こう見てくると友だちの多い子は、中学生としては明るく健全なタイプという印象がますます強まってくるが、**表19**によれば、「自分は運が悪い」と思うかどうかについて、友だちの多い子は運が悪いと思わないという結果が得られている。

このほか、自己像に関するデータは**図14**、**図15**にくわしい。全体として、ノートをきちんととっているといったまじめな生徒たちが多いが、そうした中で友だちがたくさんいる子は、「体育祭や文化祭になるとはりきる」「新しい友だちを作りやすい」「マンガが

うまい」「本やノートにらく書きをするのが得意」という生徒たちである。いわば、明るく、くったくのない生徒という印象を受ける。

なお、**図16**（**表20**）によると、中学生になって友だちの多い子は小学低学年のうちから友だちの多い中で生活している。それに対し、友だちの少ない子は、子どもの頃から友だちが少ない。そうした意味では、中学生になってから友だち関係について考えるのでは遅いのであって、小学生のうちから、友だちづき合いのあり方をきちんと身につけておくことが必要なのであろう。

（表15）部活動

（%）

		男子	女子	全体
入っていない		5.6	4.9	5.3
運動部	積極的	64.6	45.5	55.5
	サボりぎみ	22.3	13.2	17.9
文化部	積極的	2.9	25.8	13.8
	サボりぎみ	4.6	10.6	7.5

（表16）部活動×友だちの数

→運動部の子は友だちが多い

（%）

	入っていない	運動部		文化部	
		積極的	サボりぎみ	積極的	サボりぎみ
0～5人	5.7	48.5	14.4	18.9	12.5
		∧			∨
6～10人	6.4	50.8	17.9	15.9	9.0
		∧			∨
11～19人	4.6	51.1	21.2	17.1	6.0
		∧			∨
20人～	3.9	65.7	18.2	7.8	4.4

（表17）テレビを見る時間×友だちの数

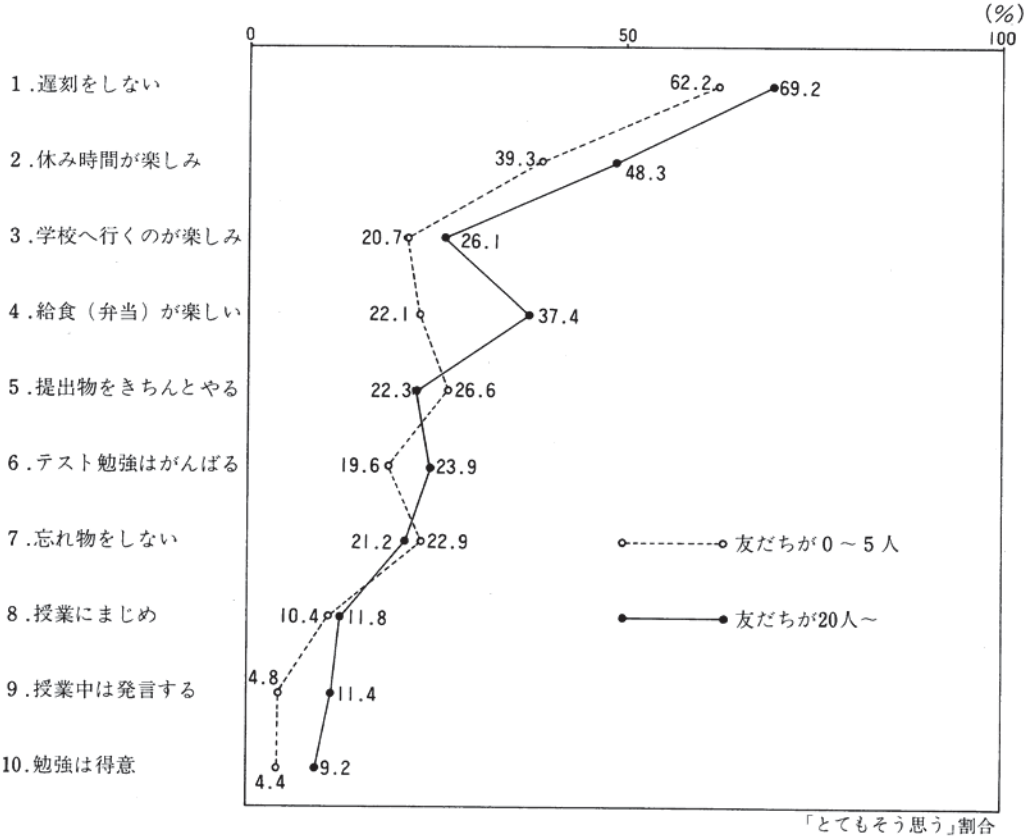
└──→友だちの多い子はテレビも見る

（%）

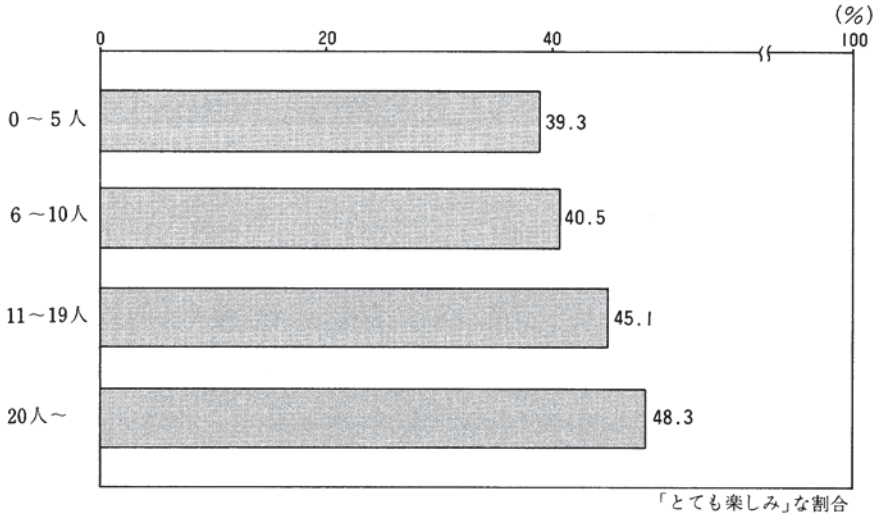
	1時間以内	1.5～2時間	2.5～3時間	4時間以上
0～5人	22.4	36.4	28.7	12.5
6～10人	15.4	37.0	33.2	14.4
11～19人	14.0	36.5	35.1	14.4
20人～	15.3	31.9	32.1	20.7

（図12）学校の楽しさ×友だちの数

└──→友だちの多い子は学校も楽しい



（図13）休み時間の楽しさ×友だちの数



（表18）休み時間の楽しさ×友だちの数

友だちの多い子は休み時間が好き

(%)

	そう思う			あまり・ぜんぜんそう思わない
	とても	わりと	やや	
0～5人	39.3	25.2	17.4	18.1
	∧			∨
6～10人	40.5	32.2	16.6	10.7
	∧			∨
11～19人	45.1	26.8	18.3	9.8
	∧			∨
20人～	48.3	28.0	14.5	9.2

（表19）自分は運が悪い×友だちの数

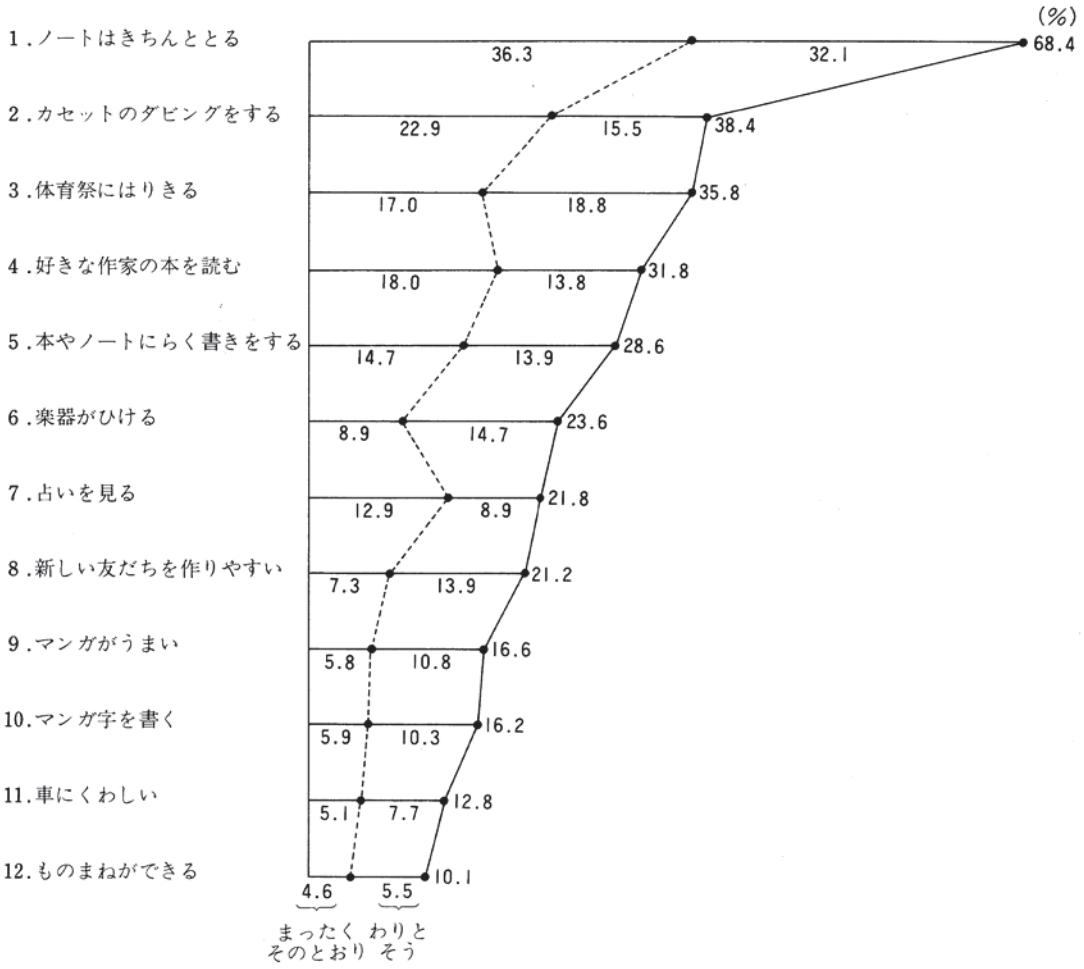
└──→友だちが多い子は運が悪いと思わない

（%）

	そ う 思 う			そう思わない	
	いつも	よ く	ときどき	めったに	ぜんぜん
0～5人	17.3	17.0	34.3	19.2	12.2
				∧	
6～10人	15.2	16.4	37.1	20.6	10.7
				∧	∧
11～19人	15.7	17.0	29.6	22.0	15.7
				∧	∧
20人～	17.0	16.6	25.1	(24.0)	(17.3)

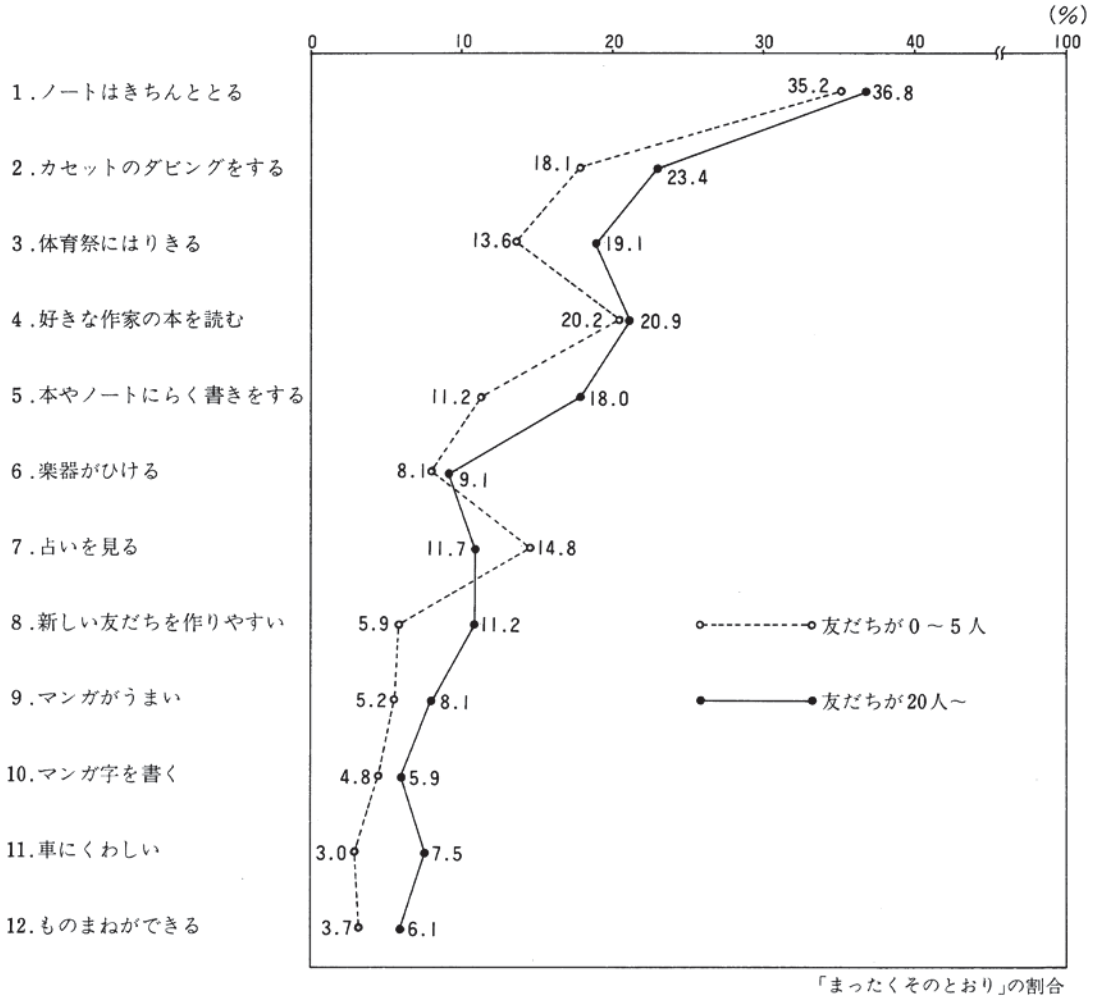
（図14）中学生の自己像

└──→ノートをきちんととっているつもり



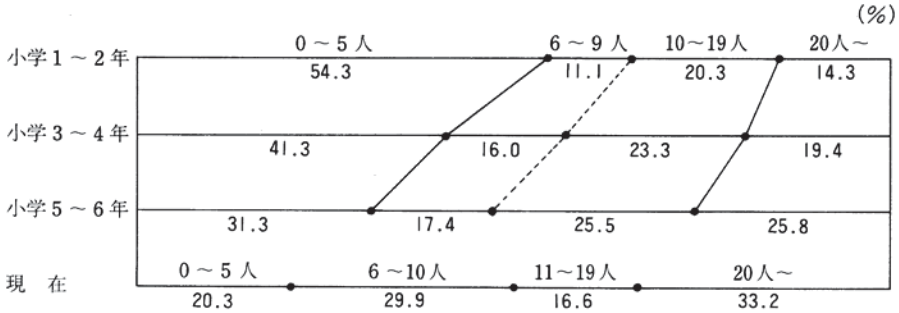
（図15）自己像×友だちの数

→友だちの多い子は明るい子



（図16）友だちの数の変化

→友だちの輪が広がっていく



（表20）友だちの数の推移×友だちの数

└──→ 友だちの多い子は子どもの頃から

（%）

		小学1～2年	小学3～4年	小学5～6年
友だちが 0～2人	0～5人	47.7	35.1	25.5
		∨	∨	∨
	6～10人	19.8	11.5	5.9
		∨	∨	∨
	11～19人	10.0	7.1	3.2
		∨	∨	∨
	20人～	5.3	2.8	0.9
友だちが 10人～	0～5人	7.5	8.4	14.6
		∧	∧	∧
	6～10人	19.8	22.9	30.3
		∧	∧	∧
	11～19人	30.0	39.9	58.0
		∧	∧	∧
	20人～	64.7	81.4	88.2